

学部生・大学院生 各位

国際教育交流課

スタンフォード日本センターでの英語講義受講生
【2026 年春学期生】募集について

スタンフォード日本センターStanford Japan Center(以下 SJC)は、米国スタンフォード大学が運営する教育機関です。同志社大学今出川キャンパスにあり、例年、スタンフォード大学から約 35 名の学部生が参加し、講義は日本の政治、経済、宗教、文化、科学等、幅広く網羅されており、スタンフォード大学本校から赴任する教授や関西の諸大学の研究者が講義を担当します。文系理系を問わず参加できます。

京都に居ながら、米国本校で提供されるのと同等の講義を受け、米国の大学生と共に学んで交流し、米国留学を疑似体験できる貴重な機会です。

下記の通り、SJC が提供する英語講義の受講を希望する京都大学学生を募集します。

※本講義は審査のうえ、所属学部・大学院から単位として認定される場合があります。詳細は「5. 諸留意点」の(6)を参照してください。

記

1. 募集要項：

講義はすべて英語で行われます。米国の学生と同様の課題が課せられ、講義への積極的な参加が求められます。登録者は京都大学の代表としてスタンフォード大学の講義に参加します。参加決定後の受講取り止めや無責任な欠席は認められませんので、よく考えた上で応募してください。

(1) 募集人数：4 名程度（1 講義につき本学学生の参加は 2 名程度とする。）

(2) 応募資格：

- ① 2026 年度前期に本学に在籍する学部生・大学院生（休学中の者は応募不可）
- ② TOEFL iBT 79、TOEFL ITP 550 又は IELTS 6.0 以上の英語能力を有する者
- ③ 日本及び日本語に関する相当の知識を有する者
- ④ 受講希望科目についての基礎知識を有する者

2. 日 程（全日程において参加必須）：

- ・応募締切：2026 年 1 月 6 日（火）正午
- ・面接：2026 年 1 月 13 日（火）12：15-13：10 又は 16：45～17：40
のうち、指定された時間帯
- ・合格者説明会：2026 年 1 月 21 日（水）12：15-13：05

-
- ・ SJC オリエンテーション : 2026 年 3 月 30 日 (月) 9:00-12:00
 - ・ SJC 授業期間 : 2026 年 3 月 31 日 (火) ～6 月 9 日 (火)
 - ・ SJC テスト期間 : 2026 年 6 月 10 日 (水)

3. 費用: 受講料は無料です。教科書・参考書の費用は受講生各自が負担してください。

4. 応募方法: 下記の (1) 及び (2) を、応募締切りまでに完了してください。

(1) オンライン申請

下記 URL、ID、パスワードによりログインし、必要事項を入力、顔写真データ (6 か月以内撮影、正面を向いたもの、無地の背景 (壁など) の前で撮影したもの、正式な証明写真である必要はない。サイズの指定なし。) 及び英語能力のスコアをアップロードしてください。オンライン申請完了後に出力される参加申込書を印刷して署名の上、その他書類ともに国際教育交流課窓口に提出してください。

<オンライン申請画面URL>

<https://area34.smp.ne.jp/area/p/nita0mjmel1pepbt9/hbbQ7J/login.html>

(ログイン ID: tankihaken_1704、ログイン PW: N9St1K)

※http の後ろに必ず、s があることを確認してください。

(2) 以下の a～c の書類を国際教育交流課窓口に提出する

- a. 参加申込書 (オンライン申請後に印刷し、自署したもの)
- b. 申請書
- c. 推薦状

※申請書、推薦状のワードファイルは、[京都大学海外留学ポータルサイト](#)から入手できます。

5. 諸留意点:

- (1) 講義は SJC (同志社大学今出川キャンパス内明德館) で行われます。
- (2) 受講期間中は、以下の保険に加入必須です。
 - ① 学生教育研究災害障害保険
 - ② 学研災付帯賠償責任保険 (※留学生の場合は学生賠償責任保険)
 - ③ 学生総合共済 (生命共済)
- (3) 今学期に提供される科目は、別紙「授業概要」の通りです。この中から希望の科目を選んで応募してください。
- (4) 京都大学及び SJC の書類、面接等による選考を経て許可を得た者のみ受講できます。
- (5) オリエンテーション～授業期間終了までの間に就職活動中の場合は、原則として申請を避けてください。
- (6) 科目登録・単位認定に関する注意事項 :
 - 1) 本講義は、2026 年度前期科目*です。大学が一括して履修登録を行いますので、KULASIS 等への登録手続は不要です。
(*所属学部・研究科によって単位認定時には前期・後期の区別がない場合があります)
 - 2) 単位認定について
 - ① 本講義受講にあたっては、単なる聴講は認められず、必ず単位認定審査をする必要があります。

- ② 参加が決まった学生は、所属学部・研究科に単位認定の審査を申請することになります。詳細は合格者説明会で説明しますが、各学部・研究科により 2026 年度前期科目の単位認定事前申請の締め切り日が合格者説明会よりも前に設定される場合もありますので、応募の際は、各学部・研究科教務担当窓口にて単位認定事前申請締め切り日を確認し、必ず申請できるように準備してください。また、面接後に合格者宛に詳細をメールでご連絡しますので、申請方法についてはメールをご確認ください。
- ③ 単位として認められる場合は、(1) 所属学部・研究科の単位、(2) 全学共通科目の単位のいずれかとなりますが、学年、所属学部・研究科により異なります。
- ④ SJC から単位は付与されません。
- 3) 2026 年前期に本科目と他科目との時間割が重複した場合は、いずれか一方の履修しかできません。重複がないかを確認するため、授業登録情報 (KULASIS) のコピー提出が必要です。
- 4) 履修を学期途中で取りやめることはできません。
- (7) SJC 及び KCJS (京都アメリカ大学コンソーシアム) の英語講義の受講経験者も応募できます。ただし、受講経験のある講義には応募できません。

※受講経験者の報告書を以下のサイトに掲載していますので、参考にして下さい。

<https://studyabroad.opir.kyoto-u.ac.jp/program/domestic/>

(京都大学海外留学ポータルサイト > 国内留学プログラム > KCJS・SJC 参加報告書)

<参考>

SJC (旧 SCTI) は、米国スタンフォード大学の日本留学プログラムとして 1990 年に誕生しました。日本との関わりを持つ上で必要となる知識・資質を身につけたアメリカの若い世代の育成を目的としています。参加学生の専攻は工学、自然科学、経済学、政治学、国際関係学等多岐にわたっていますが、技術系専攻の学生が多いのが特徴です。日本語教育にも力を入れており、来日前にはスタンフォード大学本校において日本語授業の履修が義務づけられている他、来日後は毎週 8 時間の日本語の授業が必修科目となっています。2006 年夏より同志社大学内に拠点を定めています。

所在地：京都市上京区今出川通烏丸東入玄武町 601 同志社大学明德館 2 階

【本件問合先】 国際高等教育院 河合淳子 教授・若松文貴 准教授

学務部国際教育交流課海外留学掛 滝本

Tel: 075-753-5407 Email: kcjs-sjc.kyodai@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

◆講義時間割◆

スタンフォード日本センター2026年春学期

授業期間（テスト期間含む）：2026年3月31日（火）～6月10日（水）

	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
1					
2					
LUNCH BREAK					
3 13:10 - 14:40	Queer Culture and Life in Japan by Professor Yuka Kanno	Beyond Pachinko: Japan's Korea and Korea's Japan by Professor Dafna Zur			
4 14:55 - 16:25					
5 16:40 - 18:10					

- ・同一科目が1週間に2回ある場合は両方の講義に出席する必要があります。片方だけの講義出席は認められません。
- ・期間中、各講師の都合によりクラス時間の変更等が生じる場合があります。
- ・金曜日・週末にはクラスのField Tripが行われる場合があります。

Stanford Program in Kyoto Course Offerings – Spring Quarter 2026

フィールドトリップが講義時間外（平日、週末含む）にも実施される予定です。フィールドトリップも講義の一環となり、日時の確定は、学期開始後となります。

Beyond Pachinko: Japan's Korea and Korea's Japan

by Professor Dafna Zur

Tuesday, 3rd (13:10-14:40) & 4th (14:55-16:25)

Japan has had a long and important relationship with Korea. War, colonialism, migration, and rich cultural exchange has left a deep mark on both countries. This course will locate Japan-Korea relations historically through the lens of culture, including literature, film, art, popular culture, and food. We will ask: what historical events shaped Japan-Korea relations? What brought Koreans to the archipelago in the twentieth century, and what has kept Koreans in Japan since then? How do third-generation Koreans in Japan define their identity, and how have they carved out a unique space for themselves? What is the connection between J-pop and K-pop, and how has Japan consumed Korean popular culture - and food - since the millennium? The course will explore Kyoto, Osaka, and its surroundings to better understand Japan-Korea relations, and it will interrogate the complexity of these relations through diverse cultural expressions.

Prof. Dafna Zur is an Associate Professor in the Department of East Asian Languages and Cultures at Stanford University. She teaches courses on Korean literature, cinema, and popular culture. Her book, *Figuring Korean Futures: Children's Literature in Modern Korea* (Stanford University Press, 2017), traces the affective investments and coded aspirations made possible by children's literature in colonial and postcolonial Korea. She is working on a new project on moral education in science and literary youth magazines in postwar North and South Korea. She has published articles on North Korean science fiction, the Korean War in North and South Korean children's literature, childhood in cinema, and Korean popular culture. Her translations of Korean fiction have appeared in wordwithoutborders.org, *The Columbia Anthology of Modern Korean Short Stories*, and the *Asia Literary Review*.

Queer Culture and Life in Japan

by Professor Yuka Kanno

Monday, 3rd (13:10-14:40) & 4th (14:55-16:25)

"Queer," writes Eve Sedgwick, "refers to the open mesh of possibilities, gaps, overlaps, dissonances and resonances, lapses and excesses of meaning when the constituent elements of anyone's gender, of anyone's sexuality aren't made (or can't be made) to signify monolithically." Or according to David Halperin, queer "describes a horizon of possibility whose precise extent and heterogeneous scope cannot in principle be delimited in advance."

Yet, queer is not a term meant only to fantasize a utopian "somewhere." It has been used to question and challenge homophobia, sexism and racism, under which run the ideas of "heteronormativity." Thus, by paying particular attention to the politically critical potential of "queer," this course explores queer lives and cultural practices in Japan through film, literature, theater, art, and personal testimonies. We will look at queer culture as a "lived experience" and queer life as a "cultural experience" at the same time. What does it mean to be queer in Japan? How does the term "queer" signify differently from a US context? What is the critical potential of "queer" and under what conditions can it become potential? And what is the possible danger or risk of mobilizing the term/concept of queer? We will tackle these questions by closely analyzing a wide range of texts and events. This class is designed for students interested in cultural studies, feminism, queer studies, gender and sexuality studies, LGBT activism and community in Japan.

Prof. Kanno gained her Ph.D. in Visual Studies with an emphasis in Feminist Studies from the Department of Women's Studies, University of California, Irvine. She is Professor in the Graduate School of Global Studies at Doshisha University and a founding member of Feminist, Gender, and Sexuality Studies (FGSS) Research Center, Doshisha University. Her research interests include queer theory and criticism, gender and sexuality studies, visual culture, feminist film studies and Japanese cinema. Her current projects focus on queer film festivals and transnational queer girls' cinema and culture. The author of numerous publications on queer and film theory, Prof. Kanno has also organized several queer themed-film screenings in Japan. She has taught in the Stanford Program in Kyoto since 2017.